

こぼるる光の巻

こぼるる光の巻

御遺文

親子の親み……………一

御逸事

こぼるる光……………三三

御逸話の一片……………三五

追憶……………四四

御面謁の當時……………四四

親子の親しみ

子を憶ふ親の心は親を念ふ子の心と常にはなれず。

聖典に如來の光明は遍なく十方世界を照して念佛の衆生を攝取めて捨給はずと。此意は如來の光は普遍に照し互れ共、殊に念佛の人に聖意が感應て、光明の中に攝めて給はると云ふ事である。善導大師は此文意を、衆生行を起して口に佛を稱ふれば佛即ち之を開給ひ身に敬禮すれば佛之を見給ひ心常に佛を念すれば佛即ち之を知り給ふ。衆生佛を憶念すれば佛も還た衆生を憶念し給ふ。彼此の三業相捨離せず、故に親縁と名づく。斯意を今圖に表はしたのである。

如來は私共の大御親にて、私共の靈は其子である。如來の恩寵に由て私共の心靈は靈育て、聖き人と爲して頂くのである。

私共には靈性と肉體とが有りて、肉體は人の子で、靈性は如來の子である。肉體も

二

母親の乳汁にて養なはれる様に、靈性は如來の光明にて育てられるのである。肉體も赤兒が初めて産聲を揚た時には母の顔さへ見へねども啼く聲を便に母が乳房を含ましめてくれる乳を呑むから次第に成長する如くに、私共の靈性も、如來の光明名號の眞理を聞き、如來は實に私共の靈の御親であると、確かと自覺した時が恰ど靈の子が産れたので、眞から稱名の聲が發する様に爲たのが靈性の産聲である。稱名の聲は發する様に爲たが未だ御親の慈悲の聖顔は瞻めぬ。然れども稱名の聲する處に如來の乳汁は興へて給はる。即ち念佛心に如來の光を感受するので、それが靈を養ふ食物である夫より漸々に光明を受ける丈に靈性が益々發達し、つひには如來慈悲の聖容を拜めるようになる。亦平常も御慈悲の懷に安住しつゝある身と想はるゝ。懐しい親様と寢ても寤ても共に在て離れぬ想である。而すると弱き私共の心の生活に非常に力となる。如來の聖寵と私共の心との親密な因縁は此圖に示されてある。

次に肉體にも日々の食糧なくては應はぬ如く、心靈の命も靈の食物がなくてはならぬ靈の食は無形であるけれども心に津々として得も言れぬ計の妙味は感じらるゝ。肉體も小兒は乳に養はれ、成人の後には如何なる食でも自から消化する如くに、靈の食も始は味も左まで感じないが、熟する時は無限の味が感じられる。

心靈の食の味を二種に分ちて、法喜と禪悅と云ふ。初の法喜をうれば何いふ感じがあるかとならば、眞に信心が成熟して心の花が開きたる上には、從來とは心機一轉して靈の曉となり、夫からは氣分が快廓浩漭として、天地も一變したかと思はれ、溫和なる春氣に櫻花の麗はしきを呈するように、靈氣の卓たる中に心の花開きで、常盤の花は長閑なる氣分となる。之を法喜と云ふ、また法悅とも云ふ。

次に禪悅と云ふのは、三昧樂とも云ふ。此は一心念佛して三昧を得ると、無我の境に入りて如來の恩寵と自我とが神秘的に融合する。其味を善導大師は、身心融液ほどに不可思議とのべ給ひ、明照大師は、もぬけ果たる聲を涼しき、と曰ひ、得も言はれぬ三昧の悅樂を感じる時の妙味である。

三

法喜と云ひ禪悦と云ひ、何れも深く宗教心の成熟した上の靈感である。何れも神を養ふ心、心を快活にし心廣く體肝かならしむる感情上の興味である。眞實生命のある信仰は、斯る微妙の味はひを以て養はるゝ故に活動の原動力とも成る。

世の人々肉體には和洋の料理に美を味はひ口を恣に爲るも、心靈に極りなき味はひの感するなきは、畢竟肉の奴隸である。

恣る妙味を以て心靈を養ふひ、靈的生活に入る者はいかに幸福ぞ。

吾が愛する諸彦よ、君の心は聖き糧を以て養ふ給ふ哉。實に三度の食よりは、尙尊とき靈の糧を求めて、心を養ふひ、清き生命となり、此現世を通じて、永遠に盡ざる生命を保ち、大御親の光明界に歸る事を得る人となり給へ。此この圖を説明して御願申す所以である。

こぼるゝ光

こぼるゝ光(其二) 大谷 仙界

吾祖聖人の安心起行の形式を唯言語文字の上のみ學んで吾祖の宗教的精神の内容即ち靈的實質を習ふ宗徒のまことに稀なるはいと嘆かはしきことにして、宗祖の外殼のみ遣りて核實の無きは、遠く未來に繁殖することならむ。吾輩は吾祖の靈的内容を習ひ實質を修養せむと欲して止まず。吾祖の靈的内容は祖の道詠に由て聊か窺ふ事を得。御法語の安心起行の言語は其形式を示したるも、道詠は道情の内容より漏れ出たる靈的表現にして、實に心靈靈化の麗はしき、即ち形を見れば法然房實を云はば阿彌陀如來と當時の世人讚美せられし事を窺ふに難からず。吾祖と雖も形體は四大和合の物質、若し解剖上より見るもまた生理學上より檢るも、何ぞ夫れ一般の人間と擇ぶ所やある。亦化學上の上からは十四元素にして一元素も多少ならむ。宗祖の形を見ればとの謂は右らの事にて、實を云はば阿彌陀如來とは、彌陀の光明に同化せられた

る靈的實質なり。今宗祖の道詠の中に就て一首を擧げて祖の靈的内容を窺はんか、

阿彌陀佛に染むる心の色に出では

秋の梢のたぐひならまし

吾祖初めて専修念佛の一行に入りて數十年、口に稱ふる處は光明名號、意に念ずる處は如來の靈龍、漸々に薰習功積み徳累なり、つひに彌陀の聖意に薰染し、靈化の内容はむかしの法然房の其れならで、今は彌陀の權化。昔は黒谷の禪房に在りて一切の佛敎に目を晒し、般若を繙く時は皆空の理に心をつくし、華嚴を研究せし時は事々無碍の敎判に思を凝しなど、縁に隨ひ境に伴ひ、智慧の眼は或は炳きたらんも、宗敎的實質の心情の眞髓に於ては未だ眞の靈的道情にはあざりしならむ。然るに彌陀三昧に久しく修して、薰染彌深くして益其麗はしきを呈し、君も其内容が目にも見へむものならば、昔學窓に蒼々たる心は異にして今は彌陀の光明に美化せられ、秋の時雨の度毎にいよゝ色の濃くなりしから紅になりける如く、感覺としては八面玲瓏として六根清らけく、また其の靈化の意志金剛石の磨きしに、太陽の光の映寫して、光色見耀として極みなく輝き、感情には彌陀美化の内容は歡天喜地、彌陀佗受法樂の加はる處、法喜禪悅の妙味を覺え、歡喜と平和とを得て身は娑婆に在りながら心は淨土に栖みあそぶの感。智力には自ら彌陀の光明に開示せられて佛法の眞體は自ら悟られまことに智慧第一の譽は是彌陀の智慧光が吾祖の腦漿を通して光りし結果ならむ。意志には彌陀不斷の大光明に靈化せられて金剛の意志はいかなる苦難の中にも泰然として除裕あり。老軀の流形をも却つて朝恩と感ず。この餘裕あり實に其の麗はしき事何に較へむ。秋の紅に例することは謙色の深きなり。日月双照するにも比すべきものをや。傲ふべし吾人は祖師の内容を。學ぶべし吾祖の實質を。唯形式文字の解説に巧なるも、内容實質に於て習ふことなからばいかで祖意に協はん。今辨榮、越の峻雪を凌ぐのきよき同胞なる淺井尊宿に贈るに吾祖の道詠に就き管見を陳て九蒼の一分を味はひし事を告白す。

大正三年三月廿一日長岡市大工町法藏寺淺井法順師に遣はされたる返事の御文

二

○ 「歎徳章は如何なる場合に讀誦するもまたげなし。冠婚葬祭等に依つて差別する事なし。譬へば太陽の光には祝日の日葬禮の日とて別の太陽なきが如し。いづれの場合にも此の十二光の徳に依つて益を得ざる事なし」と。

○ 或る大工がセツ／＼と働いて居る傍から、或人が能くまゝ體のつゞく事よ。大工曰く、そりやいつも休んでゐますから。でもそんなに働いてるではないか。大工曰く、でもカンナを持つ時は斧は休み斧を持つ時はカンナは休むと。上人曰く一日の中にも色々變化があるからもてる。口の働いてる時は筆は休み、筆の働く時は口が休む如く人は活動の裏面には休養を持つてゐて之が入れ交りになるのももてる。

○ 念佛は呼吸ぢや、呼吸がタイギデキツイやうではそりあ病人ぢや。平氣で不斷相續するのが本當ぢや。

○ 大正二年九月十六日午後筑前若松市善念寺に於て上人の送別會を開く。主催善念寺住職波多野諦道師、會するもの丹波圓淨裏辻倫道爪生天全等僧侶十五名外に居士大姉連若干名、時に波多野師一同に挨拶し、更に上人へ感謝の辭を述べて曰く、大徳の變化に浴する事を得たる不可思議の因縁を歡ぶ。小僧佛飯に命を續き僧となれる廿五年往生は欲しながらも道業進まず、誠に慚愧に堪へず。昨夜はつまらぬ御尋ねなど致し御無禮の段お赦しを願ひます。私の從來の信仰は一牧起請文でこれ代々の道しるべ、茫漠たる曠野の道に僅に此の道しるべを力とたのみ進む者であります。然るに今上人に遇ひたる事は「おれは今其の道を往て還つて來たぞと承はる様に感じられ難有き極みであります」。吾人と上人或は舊往還と新往來の道ほどの差別が或はあるかも知れぬが、たしかに方角は一と思ふ。之れ大慶なり。信仰に就て一大刺戟をお與へ下された

四

三

五

事之れまた深く感謝する所であります。

六

上人挨拶に答へられて、要する所唯一の阿彌陀佛、所求所歸去行別に異にする想なし。元祖の心は全體之れ阿彌陀佛——靈華の妙相——彌陀の御徳に化す。大師の御心を染めさせ給ひし如くに如來の御光に染みたまものなり。秋の梢が紅葉する如く如來の本願の靈力より發する光明に靈化せられん事を祈りますと。

○

上人未だ自宅にあるの頃康熙字典を四字宛に配列し之を暗誦し而して其一字一に就て意義運用を記憶せらる。

○

上人小金の東漸寺に入られてから一年半ばかりの後駒込吉祥寺円山師に就て五教章を學ぶ。學ぶと云ふが實は自己の所解と師の所説とを對比研究の爲めであつた。然るに寄宿の學徒いたづらに議論を戦はし争ふ事屢々なりしが、上人思へらく、佛法は學にあらずして之を修め實證すべきものにこそ。しかす我は宿舍を脱して通學せんとてその後田端より通學せらる。途上も法界觀の三昧に住して歩む時、一切皆空只ソク／＼と足音の響を聞く。後善導の書に五大皆空唯有識大の文を見て解つた。こゝに於て如來様を御勸請すべき御本堂が出来たと思つた、と其後筑波山へ籠られる事になる。

○

高等の宗教に至つては、人事上の毎日の細い事まで一々如來の御心を煩はす事を要しない。靈樞性なくとも理性がなくてはいかぬ。本當の信仰があれば惡魔もつけぬ。こんな話があるとして上人云はく、一萬石の華族で本田さんと云ふ方の未亡人が、上品上生の往生を願ふ。所がふと夫人がプランセットに熱注し出した折柄、佛さんが田舎に行つて三年の念佛三昧をなせ、名古屋の方に行けと。そこで出かけた所がこんどは佛さんが途中下車すべく命ず。降りると驛員が夫人の顔色惡きを見且つはこゝで降る

七

八

べきでなき事を告ぐ。更に次の驛に行く宿についた所が佛の告には今夜上品往生するぞよと。夫人思ふに前に三年と云はれしに今夜とはエライ速かな事よ然らば家命を呼ぶべし、其まで命を保つべきやと伺ふ。保つ。上品上生出来るやと問へば、上品下生位にしておこふ。それでは還來穢國度夫人の望も急には叶ひますまいと云へば、そう極樂にどん／＼つれこまれては困る。でも如來様は十方衆生を愛し給ふではありませんかと云はれると、狐のお阿彌陀さん困つた顔をして居る。すると一方から太神宮が現はれてどうだお阿彌陀さんやり込められたぢやないか。狐曰く各自するか時にアンタは極樂／＼と云ふが本當ありますか、そりや在りますともとて夫人は所信を語り、ついでに米粒名號の難有功徳を話した。するとソクナ難有ものなら私にも貰つて呉れい。此時夫人は初めて全く狐の仕業と知つて恐く思ひながらも言つた、なせこんな所までつれだしたかと聞けば、いつかついてやりたいと思ふけれども念佛となへて隙がない、ところがプランセットに熱注してすぎが出来た、けれど中々つく事が出来ぬ、それで體を弱らせるより外ないと思ふて、そこで食事を減らさせた。八功德地などと云ふから他に違でも咲して陥入れようと思ふたがすぎがなくてどうしても出来ぬ。とうとうこゝまで引出して來たがもうのくから東京へ歸つて呉れと云ふ。それで赤飯とアブラゲを與ふ。其夜足音して大入道が室より出する。其れより婦人は全快。其後上人が其の婦人を訪問せられたる時御尋ねして一體何でしょうと。

○

幸徳秋水を結果の上から見て其の逆説法の効果ありしを認む。彼は基督抹殺論を書いた程に天道を認めない、神も佛も認めない、天則の依つて以て遵奉すべきなしと、況んや其れ以下の人間界に於て何の服すべき君もなければ律法もなしと。此れ天下幾萬の宗教の正面攻撃の聲よりも一國中心の盲目を覺醒せしむるに強き力ありき。元來明治の政府に於て宗教無用視し自然消滅を期したるも、此の盲目政治家も天則遵奉するに足らず、況んや人爲則をやの此の逆説法に覺醒して、今や三教合同教育と宗教と

九

の連絡となれり。蓋し是れ宗教と國體擁護との連絡なりと。

10

○ 天子とは天の子、天の御意を以つて世に臨むなり。若し天子にして天の御意を忘れて徒らに君權を恣にする時は一人犠牲者は出るであらふ。共和國を造るであらう。

天子は天の子とせば國民は孫の位置のみ。天子は人爲則の主權者として尊きなり。然れども天子と云へども尙ほ尊きあり。曰く父なり。父とは之れ天父。天父は之れ天則の主權者である。天子も天父には従はざるべからず。従ふに於て天子たるなり。従ふに於て天子の位は安全なり。若し然らざれば其位危し。三寶の奴となるとは天父に事ふるなり。天意を以て下に向ふの義なり。佛教は天子の上に佛を立て天子の位を害するものではない。寧ろ其位に安らかならしむるのである。即ち天子の天子たる事を得しむるなり。此の點に於ては宗教は大なる識見を有せざる可からず。世に只人君の尊きを知つて天則の尊きを知らず徒らに君權を利用して天孫を暴壓するが如き君側にある爲政者こそ實に君位を危からしむるものなり。先帝明治天皇の如きは實に天意を常に奉事せられたるなり。敬神の帝なり。「目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ」の御製の如く神の事を忘れ給ふ事なしと。

○ 上人の憤られたのを只二度見た。

一度は勅額下賜の時であつた。丁度大正三年春上人の隨行をして東京へ着いた。淺草誓願寺へ滞在の折柄、勅額下賜の事ありて増上寺では盛大な慶讃法要の修しられるので、私は其日増上寺へ勅額奉迎に行つた。その時貰つた宗門の慶讃宣傳文の一枚刷を持ち歸り、上人に御目にかけた。すると上人はこれを一讀せられるや直に引き破り丸めて疊の上へ打つけられた。私はあまりの事に驚き、上人の顔をあつげにとられ見上げれば、上人曰く宗門の僧侶何に血迷つて此の馬鹿騒をする。元祖は現狀を見そなはしては地下に泣いてるであらう。宜下だ下賜だと喜び騒ぐべきでない。いやしくも三

11

界の大導師に對しては寧ろ侮辱である。然るを何ぞやそんな事で喜び騒ぐとは。今はそんな時ではない、宜く大法然の眞精神に活きねばならぬ大切な時だ。此の時の上人の權幕は實にすさまじいものであつた。今一度怒られたのは、たしか大正六年の秋であつたと思ふ。或る寺で五重相傳の導師をつとめられた折、隨喜の寺院達說法中も拜聴はせずに庫裡の方でつまらぬ話をがや／＼してゐる。それが本堂庫裡が接近して爲めに非常に説法の邪魔になる。上人説法終りて室に歸られると、群賊惡獸と云ふのは無道心の坊さん達の事よ、それ向ふの室にがや／＼やつてる。實に困つた者は今の坊さんだとして憤然とし給ふ。

111

○ 柳津より宮島に至る前夜來小雨あり。然るに宮島に着する時は天氣晴朗一層の美はしさを増す。上人曰く、昨夜來掃除を命じ置かれし故に此の美はしきありと。やがて神前に拍手を打つて拜禮し給ふ。——拍手、其後備中倉敷の藥師に參詣の時も拍手を打ち給ふ。依つて上人合掌の儘でよささうになせ拍手を打ち給ふやと問へば、何に拍手を打つ事も佛法にあるのですと。

○ 制度はもとローマの天主教などを選んで立派であるキリスト教等の完美的制度法を採用しつゝ、あれども、教義宣傳の實質に於ては缺けてゐる。實質は教戰の武器である。如何なる程度までの武器を要するか。曰く戴く主君の概念を明了にせよ。次で一軍の旗幟を明かにせよ。而して武器の鋭き事は智の鐵壁をも碎き情の堀をも越へ意の難關をも聞き得て、智情意三面に向つての實行を奏するものたるべきなり。

○ 商賈往來の一二行を教はり後は勝手に手習、何物書いた、何冊習つたと。淨土宗の教義又如斯一收起請、後は日課の手習何百邊何千邊……惡くはなければも昔の手習の學校の如し。

111

禪宗で嘗て大内青鸞に頼んで動行式を書いて貰つたのを開拔者よと笑はれたことがあつたが其後になつて快師天の勤行式を見られて快天は快天なり稍や宗教的に出来て居る。

○ 上人は三十七八歳頃迄は目と意とを用ひ口は只念佛だけなるが故に口説は下手、然しそれが難有い。對座して法談の時は、いつの間にもやら座蒲團よりすべり下りて一膝ぐと前に進み、ナンデンノノと、自分の膝をさすりながら、體を前後左右に軽くゆりながら話されたものだ。そして對者が何か質問する時、明了に其の質問をなし能はぬでも、上人はよく對者の質問の要點を看破して諄々として囁んでふくめるやうに説き聞かして下さつた。對者の心を能く讀まれた。

○ 地獄へ行つて焼かれると云ふ事の有無よりも、進んだ人は得らるべき永遠の生命を失ふ事をより以上恐れ悲しむのである。

○ 子供の頃は軍書が好きであつた、習字が馬鹿／＼しかつたから軍事本を寫して貸本として人に見せてやつた、百冊以上も書いた、中にも曾我物語が好きであつた、經書の師もしまつにおへぬとしてゐた。後には師まで之は面白いから寫してくれよと書かした。十四五歳頃から佛書に親しむ様になり、醫王寺の藥師堂で讀んだ。十七歳の時法界義疏三卷を作つた。其前十二歳の時和歌五十種ばかり詠んだ。それを藏つて居たのを、父が見て、それから後何が自分がつまらぬ事でもしかすと、歌をさへよむ程の者が何たるいくじない事だと叱られた。歌の中には南無阿彌陀佛を冠させたのやら、南無妙法蓮華經を冠させたのやら、七夕のやら色々あつた。其内の二三記憶のもの

のを云へば、

古の聖人のあとのこひしさに

文見て行かん其道しばを

植ゑおかば學びの圃に色々の

文の花さき香や匂ふらむ

佛にも神にもなると聞くからは

吾は聖人にならまほしけれ

二十歳の暮であつた、東漸寺へ入つた。廿三歳一月江戸へ出て二三ヶ月して駒込の吉祥寺(時宗)に於て卮山實辨師に就て華嚴五教章を聴く。此時大鹿師宮澤師等と一所であつた。宮澤師はなまけものであつた。上人は別に宿所を借りて通學した。上人は聴くのはよいかげんで既に實地を行つて居た。法界觀をやつてゐられた。師の卮山は當時華嚴學者として令名ありたれども、實は眞言の或人の書きたる秘寫講本の(聽)秘録と云ふのを持て居た。其れに依て名を得たのである。其れは見せない。だが今から考へて見ると、實地とは尙ほ隔りがあつた。八月に講授が終つたから、實地修行として一ヶ月間筑波山に籠る。下山後醫王寺の藥師堂に二十一日(實は二十一日迄はせなかつた)の斷食。其後同所にて一七日間ばかり掌燈苦行。其れより後一切經讀破、東漸寺にて師より話を聞く時などは批評的に聞いてゐた。自分は人の云ふのは何だかあぶないやうな感じがして、あくまでも自分で熟考した。東漸寺時代の勉強時には高き部屋の北窓をあけて、夜間寒風にふかれ眠らない様腕に線香を横へた。今尙ほ其のやけどあり。そこで私は上人に腕に香を焚く何の爲めに。何の爲めだかわからないが、マーンヨ、精神統一意志鍛鍊。馬鹿げた事だが、米粒も結縁の爲めに施しつたので今更やめもされず、二三年前凡を概算すれば百萬を越ゆる様である。東北地方では毎日四五百粒を施した。大鹿師と吉祥寺時代に實體論で議論した事がある。大鹿とは若い時から合はぬ。彼は唯識の立場から自分は華嚴が立場。吉祥寺へ入る前に楞嚴

をやつて居た。實體論で大鹿は相對の上に立て議論してゐるし、自分は法性の上に於て論じてゐる。

○ 一切經披見後、師の亡に遇ひ、直に百ヶ日間念佛三昧を修し、繩床に入り日夜莫廢一心專修眠るも覺るも其儘（師の亡は明治十七年頃）立つのは便と食のみ。念佛申してるとイー氣持。然し後には何にもしたくない様になる。（今は治生産業是念佛の心に住し給ふなり）其後土地の俗人や僧侶十數人を集めて内外の經典を教へ給ふ。

○ 石川の小學校を立てるに、眞珠院が非常に奔走した。其時援助してくれよ反對者を説てくれよとの依頼を受け各地を巡廻した。

印度行を主張したるも誰も金がない。依つて上人一年ばかり巡廻し、千八百圓ばかりを得て渡る。廣安師について居た村山と云ふがセイロンに居たが、金がなくて歸れないのを自分の歸につれかへつた。米粒等の揮毫に依つて難儀なし大歡迎であつた。絹に繪をかいて與ふるに或西洋婦人が日本人は道義心に富んでゐる。コンナ高貴なものを只で呉れると。又曰く嘗て耶蘇教師が國に歸つて日本には文字なし、我等が行きて教へて遣したと云つたが、コンナ立派な文字があるとて、上人の讀む本を見てしきりに耶蘇教師をそしる。

○ 上人の大悟徹底は印度より歸られた後で明治二十九年である。一寸話が他に轉するが、元軍人で高部と云ふ人が高（庚？）中山（たしか武州か）に籠つて一心に修行してゐると、自分の後の山がハッキリと見へる。それで彼は蘇東派の山色清淨身の文を聞いてゐたから、背面の山を觀見して即ち佛の法身を見たると考へた。然し剃度の師からしるしを得るも、知識の許を受くべしとあるから、誰か確かな人師についてたしかめたいと思つてゐた。所へ此の山へ礦山技師の關口と云ふ人が調査に来て、はから

ず高部に遇ひ、事の次第を聞き、それなれば東京淺草誓願寺に滞在せる辨榮上人と云ふ大徳がある、其方について聞かれたがよからうと考へた。それで同人は辨榮上人を訪ねて來た。上人はそんなものが佛の法身を見たなぞ云ふべきでない。先づ念佛三昧を修すべき事をすゝめ、其頃慶應卒業の居士澁谷坦道（又一郎）が禪室を結んで修行せる所を考へて其處にやる。禪をやるのでない念佛を一心にやらせるのである。自分も後から行く。此の道場で上人庭前を散步しながらも念佛せらる。何心なく左手を延いて柿の葉をつまみ其儘稍やしばらく真空に入る………而して後今近想像に持て居た佛を見奉る。

○ 澁谷氏の禪室は東葛飾郡高木村に在り。同君は妻君が大學病院に於て死す其以前上人に唯遇つてくれと頼む。妻が亡くなつて剃度を受けて以來信仰に入る後又悟由禪師に就て剃度す。禪師には法は聞きもせず聞かせもせず。禪門法語集は澁谷氏の編する所である。

○ 高木の禪室に於て獲得したる以前にはそんな事はあつたが此の時深く證入したのであつた。

又明相を現し、直徑一寸ばかりの圓形の光明赫灼たるものと。網島梁川の光映とは之を云ふ。五六尺の距離に見ゆる（大概は眼と平均の位置に）數個見る事もあれど大概初に一つ、或は華を見る。

○ 形式——聲だけは時に依て有る事がある。其聲虚空に周遍す。導師の五大皆空唯有誠大。

便所に入つても時として壁のない様な事もある。それとは反對に御佛の衣のァ造も明かに見へる。三昧を得れば聲まで變る。禪室で無我に入られた時間は三十分位。今では心を一にすれば何時でも拜む事が出来る。

明治三十二年三河地方へ經を弘められつゝある時には、度々感見せらる。神宮寺に

て朝念佛中思ひもせざりしに宮殿樓閣いと明了。

二二

○ 大般若六百卷大なりといへども枝なり。南無阿彌陀佛の名號小なりといへども種なり。元祖が名號を選択したるの着眼點此にあり。乍然種の儘では駄目開發せねばならぬ。然るに昔では此世の土地は駄目鬼に角種を今世で拾ひ取りて絶やさぬやう大事に持つて淨土に行けば開發すると云ふ様に考へた。今や名號を今世に漸次開發すべきである。今世に於て花開きたる一生となし、今世の華の一代散り終つて後世の淨土には直に上品の實を結ぶべきである。今世に華開かざるに於ては彼の土に於て六劫を経て開くと。

○ 或る人が上人は念佛を他に勧めはするがその割自分では稱へられぬやうだが、願くばやはり手に珠數でも絶えずつまぐつて、口に稱名の聲不斷ならば、如何に難有くもた尊さも一入ならんと、云へるにつき、其事を上人に語りけるに、上人曰く、辨榮が念佛せぬと云ふ人は釋迦が修行せぬと云ふ様なものである。彼の達磨が衆僧と共に或國王に招せられた時、王曰く衆僧經を點するに和尚獨何を經を點せざるやと。達磨曰く衆僧は經に點せらるゝもの我獨能く經を點すと。上人更に曰く、自分は念佛中さぬではない。一時は一日十萬位の稱名を爲した。百日日夜を分たす申した事もある。或時は小便が熱の爲めに眞赤になつて血の様になつた事もある。然し其時は今程の喜びはなかつた。

○ 西洋では教會出席の聽講録を結婚時の履歴とするものすらありと云ふ。人は誰でも惡氣質はあるもの其惡氣を一條／＼光明に靈化され行く事を祈り、一つ脱せば一つの光明の履歴となり、更に第二の惡氣質を靈化すべく祈つて進むがよい。

二三

○ 禪に念佛は猫が鼠を捕る如くなるべしとある。鳴かぬ猫が鼠はよく捕ると禪では氣張つて居る。行誠と云ふ爺さんも鳴かぬ猫であつた。人に依ては可成鳴くやうにして行くもよい。

二四

○ 苦も錆があるからだ、さびがなくなれば苦もなくなる。禁煙が苦しいのは喫ひたいと云ふ煩惱のさびがあるから、此のさびが抜ければ平氣にして樂し。

○ 聖經を閲みして聖蹟のしたはしければ

濱千鳥あとを見てよりあくがるゝ

なくねを今はきくよしもかな

印度佛蹟參拜航海中

國をおもひ佛をしたふ朝な夕な

日の出入のかたぞこひしき

戀しけれ西にかたふく夕日かけ

さすがにみだをしたふ身なれば

印度波羅奈鹿園の聖蹟に詣でしとき

いにしへの鹿野の園生に訪ふ秋の

鳴く音もなくていまはかなしき

佛陀伽耶に詣でし時雨後の月を見て

萬代はまだ遠ければ今更に

再び照せ佛陀伽耶の月

○ 上人九州を去らるゝ時(大正二年九月廿七日)若松より戸畑渡しに見送れる人々が「愈々御歸りなさる様になりました」と……………上人曰く、「私には歸へると云ふ事

二五

はない」と微笑。

○

宗内の或坊さんが上人のミオヤ〜と云ふを兎角きらへるに對し、上人某に曰く、君如来をオヤ様と云ひますか。某曰く否。阿彌陀と呼ぶ。上人曰くエライ他人氣ぢやな。君は自分の肉身の父を呼ぶに其の名を呼び給ふか。それともおとうさんと云ひますか。

○

筑波山上に立身石とて大岩のふる所に岩屋がある。之は親鸞上人が餓鬼化導した邊跡であると云ふ。此の内に上人は一ヶ月籠られた、(此の山には係があつて長く居る事は出来ぬ又届なほせばよいけれども)此間に二回靈夢を感ず。

初見には金龍現はれやがて文珠普賢獅子と象とに乘れり、餘程遠い距離であつた。

大きく明了。そこで釋迦在ます等と思ひ見れば、大きく立像で在ました。次の靈夢は山を出る前夜の事である。曠野に出るに狼の如き猛獸に追はる如何にかして逃げんとするに不思議にも自由に空へ飛べるから一散に飛び去る。然るに向ふに經藏の如きがあり蟲ほしの如く經がほしてある。あゝ結構な事である、平素一度は坊主として一切經を見たいと思ひしに今茲に来るとは佛の手引なり歡んで夢さむ。翌日山を下り其後幾日かを経て埼玉縣武藏國北葛飾郡飯島村宗圓寺に於て黄蘗收の一切經を二里ばかり隔りたる東漸寺より取寄せて披見せらるゝ事二ヶ年半位。(明治十五年一月頃で十六、十七年九月に宗圓寺を去つて東漸寺に歸り十人ばかりをあつめて内典を午前に外典を午後に教へらる)

上人藏經披見中、増上寺行誡上人より使來たり、面會したし木山に來られよと。上人は體よく斷つて招きに應せず、専心聖典を披覽し給ふ。此の時の歌に、

我庵の庭の夏草茂れかし

訪ひ來む人の道わかぬまで

又た、上人筑波の岩屋に在るの時、小さき白蛇が出て膝に上る。上人は篋子(上人の着せる衣)の裡で覆ふが如くして軽くさはると、それを感せぬもの、やう。實におとなしいものである。そのまゝ蛇は悠々として去つたさうである。話の序だから書添へるが、筑前の折尾本城の佐藤信隆氏方にて御説法の時、庭のまがきの所に大きな雌雄の蛇が出た。あゝ蛇かと云ふので人々立て見る、上人も立つて暫くじつと見て、美れいですねと。

○

大正二年十月十三日午後一時四十分廣島臺屋町源光院に於て播州姫路眞光寺檀徒居士森田如香氏に上人腦の血液不循を封するの祈禱を頼む。上人祈禱と功力に就て曰く元來宗教には病氣を平癒し得るの心力、宇宙の妙川を感應せしめ得べきものである。彼の藥物療法といへども其藥物も元法身の恵みなり。宇宙には生かすべき靈力の充ち〜てる事は電力の普通なるに等し。けれども之を取る事を知らざれば得られざるなり。然るに淨土教が現世祈禱を排したるは其功なき爲めにあらず、功はあれども稍もすれば人は現在の近益に溺れて遂に大益を逸する事多きを以て其を嫌むが爲めなり。「若し此の事誠ならば何に〜の益を垂れ給へと願掛くるに果して願の如く此方が誠ならば利益はあるものなり」。

○

備中倉敷にて信徒が長い道中で御疲勞で御座りましよう云へば、無始以來六道輪廻で、イ、エ今日、ア、今日の話でしたか。

○

猫が鼠を喰つて居る處へ人が來ると取られはすまいかと思ふと、ウー。日本人は金や國をのみ心に喰つて居るから眞の宗教の人が來ても國を取られはすまいかと思ふてう。眞の宗教家は鼠(國)の如き物質を欲するものではない。是も自分の國となれば幾分便利だと云ふ考へは思つて居るかも知れぬが、宗教を手段として國を取るなんと云

ふ考へはない。若しありとすれば其は宗教家ではない、政治家の化物である。

○ 上人十五六歳の頃檀那寺より書を借りて讀んで、導師の釋の、十方の世界皆嚴淨なりといへども西方極樂の精なるには如かず、との文を見て嬉しくて一夜眠れぬ事もあつた。然し幼稚な考へであつた。此土と極樂との間の溝のない様になつたのは餘程以前の事である。

○

西方の彌陀は永劫の間働いて働きだめで淨土を構へられたと云ふも抑も誰の家で働かれた、誰の土地を買つて家を建てられたのぢや誰の家誰の土地！其本を認めよ。

○ 何の爲めに來た

地獄行の薪木取りに來た人。寶取りに來た人有漏の寶——少善根。無漏の寶——彌陀の光明に結ぶ實そこに人格あり品位あり靈格あり非人格あり。

○

菩薩の悟りの一つに音響忍がある、凡ての物事を音の如く響の如く悟る。音や響は何處より生じ來つては更に滅し去る。萬法皆響の如し。本來聲と云ふものは無いが、或る因縁に依て生じたるなり。抑も又何處に去るや、松風の音蛙の聲に就ても考案せよ。怒の如きも又聲の如しぢや。

○

凡夫ちやから地獄や餓鬼や畜生もある。あるけれども胸に阿彌陀佛を本尊とせば彼等は皆弟子となり、善用される。第六天の魔王も釋尊の弟子となりて善化したるが如し。家庭に於ても信仰を得たる人が精神的に家庭の心棒即ち本尊となりて他を漸次化して行く様にすれば、家庭が菩薩を作る處となり小極樂となる。西方極樂とて阿彌陀佛が本尊となりて十方の惡業生を迎へて弟子とし靈化成正覺せしめ給ふなり。

○

筑前飯塚町島田吉右衛門氏藏上人筆、

彩色せる雲上の五智寶冠大日如來の自畫自讀に

大日彌陀同體異名 極樂密嚴名殊一處

名號六字諸佛總持 念佛三昧加持成佛

顯密分流同入大海 歸命毘盧阿彌陀尊

○

夏の暑九十度なりといへども彌陀を思ふの念百度なる時は尙ほ凌ぎ易く、寒氣零度以下になもとも内彌陀の慈光を喜ぶ温かさある時は寒さも尙ほ堪へ易し。

○

今夕を愈々暫く別となりつるを以て話したき事もあれど殘し置く。元より兄弟なりしも會はざる以前は知らずなつかしからず。會ひ見てぞ因縁の糸生じ心には常に此糸をたよりて念ふ。又た時來たらば此の糸に引かれて相見えん。

御逸話の一片

中 川 弘 道

大正七年の八月一日であつた、私が始めて、廣島心行寺で故聖人に拜謁を許された時、恐るゝ御膝下に進み先づ人間並々の挨拶をして『大變毎日お暑いことで殊に昨今の暑さには御同様困ります』云々と申上たれば上人は横の窓障子をお開けになつて『へーお暑いので結構ですな、御覽なさい近頃暑氣が強くなりましたから田圃の稻の葉莖の繁つたこと、昨今の暑さは實に難有いことすな』甚だ面食つて何とも申上ることが出来なかつた。

大正九年の六月(之れが私地方の御傳道の最後であつた)私の地方へ御傳道下さつて之れから次の豫定地へ御移錫にならむとする。一同驛迄御見送り申上たれば發車迄にまだ六七分間ある、故聖人は三等待合室の腰掛にお上りになつてお見送りして居る信

者を皆なお膝下にお集めになつて、『鶏の卵は……』御法話、改札を終り列車にお乗り込みになる。車掌の警笛の聞ゆる迄まだ一分餘列車の窓に身を寄せ給ひ、集れる信男信女に『お忘れなされるな、いかなる所にも時にも大ミオヤの慈光のかゞやかぬところはありませぬ……よくお念佛なさい』ヒューと汽笛一聲發車の響き動く迄、寸陰と雖も無駄に過し給はぬ、傳道の使命をお果し下さる其御態度、宗祖の御流罪の御道すがら到る處に御化度を蒙れる御事蹟もかくやと偲はれぬ。

大正七年の十月故聖人攝津の法藏寺に御化導中、京都の恒村先生御夫婦、京大の中井先生の三氏を御引合せすべく、大阪驛前にて會合箕面電車にて箕面に下車、法藏寺迄約一里半餘、道中中井恒村兩先生未だ今日の信仰無き時なれば議論に花咲き、質疑百出、解決せぬまゝ、法藏寺着、三氏を聖人に引見、忽ち古る新聞をとり大圓を圖き給ひ公衆の御化度の寸暇我等四名に對し懇ろなる御説法、夫れが箕面より此の寺に到る道中にて解決出來ざりし諸問題を氷然として解決すべき御説示には、一同啞然として顔見合せ、一同次の間にさがりて、中井先生中食の携帶パンをパク付き乍ら『之の僧は凡夫ぢやない、あれが神通力と云ふのだらう、自分等の道中の話をどうして分つてお居て知ららむ……』

追 憶

渡 邊 信 孝 (謹 話)

○私共がお伴してゐた時分は専ら、阿彌陀經(阿彌陀經を平假名で書いて澤山繪の挿入してあるあれです)を一般にお頒ちになりました。私共はそれを二三千部擔いでお伴して居たもので只今用ゐて居ます、禮拜儀はいつ頃からお用ひ始めになつたのか私は存じませぬけれど、づつと後の事でありませぬ。

其の頃は三昧の事實はあまり口にしなない様に教へられて居ました。色々三昧の境地を上人にお話すると、『ウンよしよし、もつとシツカリお念佛申すのだ』と教へて下さ

つて、今頃の様に、誰も彼も競争の様にやれ、あゝだつた、やれかうだつたとは一切申しませんでした。又他人に自分のいたゞいた光明の話を申すことは一切嚴禁でありまして、やれ靈を見たの、光明を獲得したのといふ様な事は上人は一寸もお褒めになりませぬ『只一心にお念佛を申せ靈を見たのどうのと言つて暇をつぶしてはならぬ』そんな事はどうでもいゝといふ風に教へて下さいました。

今日ではやれ禮拜儀が改訂せられてゐるのどうのと議論する人がありますが、アナ事は上人の偉大さを傷けるもので上人の御真意を云爲するもの爲す可き事ではないかと思ひます。事實又、その當時ある人の如きは自分が佛になつたと吹張るといふ様な事も出たりしましたが、今日は全く皆がさう云ふ氣分になり勝ではありますまいか。

○上人の御説法は一々對機説法でありまして、よく『一尺位しか使へぬものに五尺、一丈の繩をやつたつて働かすことが出來ぬから』と言つて御笑ひになりました。聖者が自分が支那へ旅立ちするとき、此の心得でお念佛を勵めよと御言つて下さつた左の軸物。

阿彌陀佛の眞金色にして圓光徹照して端正無比なるを想ひ 行住坐臥失意瞋癡人の如くならば此の定得易し若し斯の 如くならずむば三業縁に隨て轉じ定想波を逐ふて飛び縦ひ	五方便 欲と精進と 念と慧と 一心となり
南無阿彌陀佛 佛陀那辨茶	四輕安 七念
千年の壽を盡すも法眼未曾て開けず	二精進 一擇法 三喜
我はた佛にいつかあふひ草心のつまにかけぬ日ぞなき	
御名をよぶ聲にいつしかすみわたりにやどる月の面かけ	

○書は實に御自在で諸種の書體の名號その他が残つて居ります。○當時上人は四十七八歳で御元氣でしたから、從て僧侶などの來て念佛の心得を問ふ者があつると、キット『直に山にお出でなさい。ソバ粉、木の實、木の葉の類を食べて一心に申しなさい。立派な美味しい食物を攝つて、疊の上でやつてゐては暇がかゝる

から、今直ぐにお出掛けなさい、ソバ粉一升もあれば一ヶ月位保てるから」と御言いました。

若のその坊様が山に籠つて申しても心が亂れるとか、食事のことの苦痛や睡眠不足の苦痛を訴へると、『壘の上で樂に寝て美味しいものを食べて居て光明を獲得することは困難だ。そんな事ではとても同行を導くことは出来ぬ。それ位のことには耐へられぬ様な機根では到底駄目だから、在家の者となり勤をとるなり、十露盤をとるなりして農業商業を勵みなさい。だが在家の者となつても決してお念佛を離れてはなりませんぬ只僧侶となることだけはお止めなさい』と申されました。

○恐くは、其の當時上人の御後を嗣せやうとお思ひになつた程の機根の人は無かつた様です。實際上人は左手に油を燈して經を讀み、お燈明になさつた程ですからね。

○お修行のとき横になつてお寝みになる様な事はなく、念佛をしながら、お寝みになりました。『撞木の音が次第に細つていつて遂に止まり、ハタと横に倒れるとき千仞の谷底へ叩き落される様な氣がするものだ。檢めして見よきつとあるだらうが、その間十分か十五分位である、寝るのはその間で十分だ』と仰言になりましたが、事實上人は横におなりになることはありませんでした。

壘の上で朝日が上るまでも樂々と寝てゐて、それで靈感が見えたの三昧發得したのといふ様なことは片腹痛いわけです。上人の御修行と比較して誠に勿體ない事です。

○よく上人の悪口を言ふ人々もありましたが、其の膝下に一時間二時間居ればキツト感化されてしまひました。淺草の誓願寺に居られる頃よく大學生などが御説話を拜聽に來られました。極樂の説明が聴きたいとか念佛で極樂に參れる理由など聴きに來られました。上人は聖畫の筆をとりながら御質問なさつて、法科の人なら法律家の學説とか人物とかの質問があり文科の人ならば文藝家の思想などの御質問がありました。すると學生の方では自分の知つておる限り話します、そして、極樂詣のお話を伺ひたいと申しますと、『話はもうお終ひです、貴下はよく極樂の事が解つて居ます』と仰言

います。學生の方は一向要領を得ぬものだから又質問を繰り返しますと、上人は『貴下は見もせず、直接面談したこともない獨乙、佛蘭西等の學者の人格なら、學説なら手に取る様にお話になる。念佛して極樂に參らせて戴くのも同様だ。貴下は、學者の著書を御信じになるから、學説を理解し云爲なされる。念佛の道もその通りだ。釋尊の説きをかけた道に一點の疑惑がないからよく念佛して淨土詣りが出来るのだ。未來も現在も同様だ異なるところは無い。釋尊のお説きになつたこと一點の疑がないから參れるのだと申されました。學生達鎌倉等で聴く説法と異り肝銘したとよく申されたことでした。

○『難信の法を説くこれを甚難となす』とよく仰せになりました。

○『極樂に入るもの曉天の星の如く少く、地獄に墮ちるもの五月雨の如く繁し』とも仰言りになることが屢々でした。

○之は去年もお話した事でしたが、青木清三郎氏にの御説法は講壇でお説きになるところとは異つて居ました。ので、お尋ねしますと、『青木様は殆ど佛果を得るところまで修行がつむで居るから説くところも自ら異なるのだ』と仰言いました。又動坂の近藤のお婆さんの邸(近藤祐子氏邸)で『拙堂に八十日晝夜兼行で申させねばならぬ』と仰言つたさうです。

○私が、上人にお訣別れるとき『臺灣なり朝鮮なり、お前の思ふところへ行つたらよからう』と自由の行動をお許になりましたが、實は之は私の機根の不足を御觀破なさつての事でありまして、私は落第したわけなのです。若し私に機根が十分で、機熟して居たとしたら、決してお手許からお離しになることはなかつたらうし、お膝下に居ればもつとまじな人間になつたらうにと思ひます。之など皆對機説法の一部と考へられます。

○又講壇の上から、ゾット見渡して大抵信者の頭の程度を見極めて御説教になりました。『今日の説教は二人位は理解したらう』と申されますと、キツト其の夜か翌朝かに

一人二人は『お陰さまで心の開がスバリと切り開かれました、有難う御座りました。』と感涙にむせて感謝する人が出て来たものです。上人の人を御覧になる力は實に大したものでした。

○私共、御伴して居ますと、よく色々な事を申上げる人があります。すると上人は『ア、さうですが、さうですか』と感心しておきになりませぬ。後で私共、『上人あんな虚言を感心してお聴になるものはないぢやありませんか』と申しますと上人は『なに向ふが此方を利用するから、此方も向ふをお念佛に利用するのだ。向ふの話を打ち消してしまつたでは、もうやつて来ない。あゝして、よく聴いてやれば度々話しに来るだらう、その中結縁されて念佛が申せる様になるから。』と仰言いました。

○『拙堂や、生きた阿彌陀様にはなれなくも、せめて生きた觀世音菩薩になれよ』とよく仰言いました。

○私は現浄土宗管長山下現有上人にすゝめられて辨榮上人におつきしたのです。山下上人が、其の時『大徳にも魔がつくことがあるから、道心堅固な信者を辨榮上人に附ければならぬ』と仰言いました。行誠上人は早くから辨榮上人に眼をつけられて、何かと辨榮上人を御導きになつた大徳であります。近藤祐子氏などは魔除けとして辨榮上人行誠上人がつけられた信者なんです。

○當時、上人を信仰する側は、上人を神通自在だと云ひ、非難する側は墮落坊主など、申しましたが、私は両方の何れも信用しません。『神通自在』を文字通りにお示になつたことも無ければ、さうかと言つて墮落坊主などは勿體ない事で、戯談など一言半句も仰言つたのを聴いたことはありませんでした。

○それは兎に角としても、眼光炯々として、眠つた様の眼でなく、一見直に尋常一様の僧侶でないことが解りました。私の妻など、何も知らぬ者ですけれど、竹内氏宅でお目にかゝつた時、生佛様にお會ひした様でしたと感激して居ました。之は萬人が萬人承認するところです。上人の御説法は本當に釋尊直きく説法の如くいくら疑つ

てかゝる人でも必ず深く信する様になつたものです。私など誠に疑深い者で、外の方々の説法はどうも極樂の御話など聴いても、本氣に受け取る事が出来ませんが上人の御説法だけはどうしたものか疑ひ得ませんでした、やはり徳の然らしめる處でせうか。○『年寄の獨り遊びの楽しみは、南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛』と教へられました。私も亦年寄になりました。お念佛して餘生を送らうと思つてゐます。

辨榮上人に御面調の當時を追想して

富 田 と し

私の永久に忘れる事の出来ない恩人として日夜その慈恩をおしのび申して居ります故辨榮上人に初めてお目にかゝりましたのは、大正七年七月に、上人が當地に御巡教の御足をお止めになつた折でございました。その節は、大谷、佐々木、中川、土屋上人方が御隨從遊ばされ、辨榮上人は、非常に御畫が御堪能で、米粒に名號や佛畫をお描きになる、不思議なお方とのみ承つておりましたが、一度その御風貌に接しました時、お身なりこそ黒染の衣のとり繕ろはぬ御様子でしたが、何處となく貴き御人格にうたれて、自然と頭の下る思ひが致しました。その時から私は、只人ではおはさぬ事を感じたのでございました。低い御聲で順々とお説きになりましたのはミオヤの御慈悲の事のみで御座いました。今まで如來様のお慈悲を承りたひと憧れておりました事として、私は渴する者が水を得る思ひで、一心に聴聞致したので御座いました。その第一日目にお説教が終つてから名も御存じのない私を上人は居間におよびせになりました。何事であらうと御側に參りまして、『お上人様、ひどいお著さでございました。』と申し上げますと、『暑いので結構です。著さの強いほど御米はよく實ります。著さの強いのはミオヤの御恵みが強いのです』と仰せられ著さをお厭ひもなく一寸の御休息も遊されずに御説教の暇には書畫にいそしみ給ふ御有様を非しまして、著ければ暑いと不足をいふ我が身の足りなさを恥ずにはおれませんでした。そして御懇ろに尊きおさ

としを賜つたのでございました。たゞもう有難さと勿體なさに、溢れる涙の中から拜聴いたしました。かうして五日の間お説教の後に召されて、お話を承つたのでございました。上人がくり返し／＼親鳥と卵の例へをお説き下されましたのが、今でも私の記憶の中にハッキリ残つております。私がお尋ね致したいと存じて居ります事をまだ申し上げぬ中に、上人は殊々／＼その事についてお説き下されましたのを私は實に驚き入りました。この御方こそ法然上人の御再來ではなからうかと感じました。その節、上人にお願ひ致しまして親縁の觀世音の御姿をかうして頂きました。當地の御布教をおすましになりましたから、上人は諫早に向つて御出發になりました。僅か五日間の御縁でございましたが、何となくお懐かしきお別れの折は親に離れる思ひで、御伴して行きたい様なお慕はしさが一杯でございました。思へばこれが最初で最後の御對面だったのでございました。

その後上人は諫早にて御教化の御忙しき中より、觀世音の御姿の傍らに信仰する者の姿を記された御はがきを賜り、その後あの御懇ろな御手紙に、日頃拜み給へる御佛の御畫像を封じこめて賜りまして東京にお移り遊ばして後三昧佛の御畫を御送與下さいましたあの御寸暇もあらせられぬ御中より、私風情にまで御心を懸け給ふて、お別れの後迄も御導きを垂れ給ふ深き御慈悲は私の心にしみこんでいつ／＼迄も忘れる事は出来ません。

明年は早岐の大念寺に御布教下さいますとの事に、そのみを樂しみに致して御待ち申して居りましたのに其の年に極樂寺にて、おかくれ遊したとの報に接しました時の悲しみは何にも例へ方がございませんでした。その悲しみの中よりも上人の御靈は永久不變に私と共にましまして私を御導き下さるのだと確信する事が出来ました。以來九ヶ年、常に私の心の中に上人の生ける御姿はましまして、ともすれば悪魔の誘ひに誘はれようとする私を、鞭うつて下さるのでございます。此の罪深き身が細々ながらも信仰の白道を、たどり行く事が出来ますのも、御上人の御守護があればこそで

ございます。その後上人の御意志をお繼ぎ遊ばせし御講師の方の御熱心なる御指導によりまして光明會が日に普及發展致しまして、私共の信仰をお育て頂きます事はよなき喜びでございます。浄土より御照覽の辨榮上人の御喜びはいかばかりかと存じ上げます。今は悲しき御形見となりました、御染筆の品々を拜しますにつけ新なる涙と共にいやますものは御したはしさの念でございます。

昭和二年十一月廿八日印刷
同 三十日發行

誌代年七冊壹圓貳拾錢(郵税共)
年拾貳冊 貳圓(郵税共)

編輯兼 山崎 辨成
發行人

東京市小石川區若荷谷町九八
印刷人 小林七太郎
電話小石川一四九五

發行所 東京市小石川區水道端二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六八五一番